

『金藏論』と中国北朝末期の仏教

宮井 里佳 (埼玉工業大学准教授)

『金藏論』は、北朝末期（六世紀後半）に仏僧の道紀によって撰された、類書に近い形式を持つ仏教の要文集である。『金藏論』は、資料が少なく不明な点の多い北朝後半期の仏教を探求する上で、貴重な資料となる。本稿は、『金藏論』に見られる当時の仏教の様相を考察しようとするものである。

1. 『金藏論』の現存諸本と構成

1.1 『金藏論』の現存諸本

はじめに、現在判明している『金藏論』資料について確認しておきたい。

『金藏論』は、中国ならびに日本において広く流布した形跡はあるが、長く散逸したと考えられていた。しかし、一九二二年、興福寺蔵の『日本霊

異記』(国宝)の古写本が発見され、その裏面に『金藏論』巻六が書写されていることがわかった¹⁾。その後、大谷大学に所蔵される法隆寺旧蔵巻一・巻二合本の存在も明らかとなった。これらの発見は、日本の最も著名な仏教説話集の一つである『今昔物語集』天竺部との密接な関連が指摘されるに及び、日本文学の視点からの研究が相次いだ。

一方、仏教学分野においては、『金藏論』日本伝存写本が見出されて以降も、まったくと言って良いほど注目されなかった。近年になってようやく山路芳範氏によって、京都大学附属図書館蔵『金藏論』巻一・巻二(大谷大学蔵『金藏論』巻一・巻二の転写本と考えられる)が翻刻された。また山路氏は、中国の仏教類書の一つとして良いであろう義楚撰(954年)『義楚六帖』において、「金藏経云」として『金藏論』が抄出引用されていることを明らかにされた²⁾。これらは『金藏論』研究を本格的に進めるための基礎作業の一つとなった。

さらに最近になって、『金藏論』研究を大きく進めたのは、中国文学分野の荒見泰史氏である。荒見氏は、敦煌写本の中に『金藏論』テキストを発見し、『金藏論』に関する数本の論考を発表された³⁾。これら一連の研究

1) 現在国宝に指定されているのは、『日本霊異記』面であるが、現物調査により、本来は『金藏論』が表面で『霊異記』が紙背であることを確認した。

2) 山路芳範「義楚六帖引用典籍考—巻九から巻十二について—」(『仏教学研究』第三四巻第一号、1991年)。同「『義楚六帖』引用典籍考三—『金藏経』(衆経要集金藏論)」(『印度学仏教学研究』第四三巻二号、1994年)。同「金藏経と今昔物語について」(『京都文教研究紀要』第五号、1997年)。「京都大学附属図書館所蔵本『衆経要集金藏論』巻一」(『仏教学会紀要』第七号、1999年)。同「京都大学附属図書館所蔵本『衆経要集金藏論』巻二」(『仏教学会紀要』第八号、2000年)。

3) 荒見泰史「變と變文」(『国文学 解釋と鑑賞』2003年6月号)、同「敦煌的故事綱要本」(『漢語史学報專輯(総第三輯) 姜亮夫 蒋礼鴻 郭在貽先生紀念文集』、2003年)、同「敦煌文学与日本説話文学—新發現北京本《衆経要集金藏論》的價值」(『敦煌与絲路文化學術講座』第一輯、北京図書館出版社、2003年)、同「敦煌文学与日本説話文学—新發現北京本《衆

は、中国における故事綱要本や敦煌変文の発展過程についての考察の一環として行なわれている。

荒見氏が報告された『金藏論』敦煌諸本に加え、敦煌写本研究の第一人者である方廣錫氏にご教示を受け、さらに調査を進めたところ、我々は、北京一三二二（爲八六、BD三六八六）・俄藏Dx〇〇九七七・北京大学D一五六（一連のもの。敦煌本Aと称す）、北京八四〇七（鳥一六、BD七三一六）（敦煌本B）、スタイン三九六二（敦煌本C）、スタイン四六五四（敦煌本D）を確認することができ、これらによって、『金藏論』巻五、六がほぼ判明することとなった⁴⁾。

さらに、韓国において、南権熙氏、崔鉛植氏によって、梵魚寺蔵の高麗後期の木版『金藏論』巻一、二合本ならびに巻二断片が発見、報告された⁵⁾。この梵魚寺蔵木版本は、冒頭に目次が付されている、すなわちすべての章題（「縁」）が列挙されているという点で、現在のところ世界で唯一の貴重なものである。さらに、梵魚寺本は、巻一は日本写経と合致しているが、巻二は日本写経のものとは異なっている。これまで、日本写経の巻二については、疑問を抱いてきた。それは、他の巻に共通して見られる「～縁

経要集金藏論」的価値』（『仏経文学研究論集』、復旦大学出版社、2004年）、同「中国国家圖書館蔵敦煌写本、北京8407（鳥16）『衆経要集金藏論』校録」（『西北出土文献研究』三、2006年）。

4) 北京8407・スタイン4654は荒見氏論文、北京1322は方廣錫氏のご教示による。

『金藏論』敦煌諸本について、宮井里佳「敦煌諸写本による『金藏論』巻五、六の解明」（『印度学仏教学研究』第五五巻第一号、2006年）において簡単な紹介を、宮井里佳・本井牧子『金藏論』——新出の敦煌本と巻五・巻六の問題を中心に——（『文藝論叢』第六八号、2007年）において詳細な解題を行なった。そのうち最も重要な写本について翻刻を公刊した。宮井里佳・本井牧子「『金藏論』敦煌本翻刻——北京1322・俄Dx00977・北京大学D156——」（『文藝論叢』第六七号、2006年）。

5) 南権熙『高麗時代記録文化研究』（古印刷博物館、2002年）45、46頁、崔鉛植「『金藏論』에 대하여(『金藏論』について)」（『仏教学研究』第9号、2004年）。

という章題をもたず、話の配列にある程度のまとまりはうかがえるものの、その分類基準が他の巻とは異なること、さらに、他巻には『法苑珠林』との同文的同話を多く見出せるのだが、巻二には『法苑珠林』との同文的同話は一話もなく、すべてが『経律異相』との同文的同話であること、という他巻との相違からである⁶⁾。梵魚寺本巻二の内容構成は、梵魚寺本冒頭の目次に一致し、さらに日本写経の巻二に比べて、他巻との相違もない。したがって、梵魚寺本巻二が『金藏論』の本来の内容であろうと考えられるのであるが、これもまた現在のところ世界で唯一の資料である。以上のように、梵魚寺本の発見は、『金藏論』研究を飛躍的に進展させるものなのである。

以上のように、簡単な研究史とともに『金藏論』現存資料を確認してきたが⁷⁾、以下のとおり、本稿で使用する略称を挙げて掲げておく。

- 大谷大学博物館蔵写本〈谷大本〉(巻一・二)
- ↓転写か
- 京都大学附属図書館蔵写本〈京大本〉(巻一・二)
- 梵魚寺蔵木版本〈梵魚寺本〉(巻一・二)
- 興福寺蔵『日本靈異記』紙背本〈興福寺本〉(巻六)
- 北京一三二二・俄藏Дx○○九七七・北京大学D一五六〈敦煌本A〉(巻五・六)
- 北京八四〇七〈敦煌本B〉(巻五・六)
- スタイン本三九六二〈敦煌本C〉(巻五)
- スタイン本四六五四〈敦煌本D〉(巻六)

6) 本井牧子「大谷大学蔵『衆經要集金藏論』考一卷第二の問題を中心に―」(『大谷学報』八五巻三号、2006年) 参照。

7) 『金藏論』の抄録複写などと考えられるものについては、他にも数点存在するが、本稿では取り上げないので、ここには挙げない。

1.2 『金藏論』の構成と形式

まず、『金藏論』の構成について見ておきたい。

現存唯一である梵魚寺本の目次によると、以下の「縁」に分類される。

邪見縁第一	殺害縁第二
罵詈縁第三	懺悔縁第四
称仏縁第五	観像縁第六
聴法縁第七	求法縁第八
戒縁第九	食縁第十
業縁第十一	布施縁第十二
慳縁第十三	塔縁第十四
像縁第十五	香花縁第十六
燈縁第十七	幡蓋縁第十八
出家縁第十九	袈裟縁第二十
孝養縁第二十一	雑縁第二十二

『金藏論』の構成については、谷大本の序文には「集成七巻」、「都合今九巻、有二十四章、有百九十二條」、『続高僧伝』道紀伝には「一帙七巻」とある。ここで巻数については、七巻と九巻という二種類の記述が混在しているが、現存写本の構成を見る限り、七巻の可能性が高いように思われる。なぜなら、現存の巻六が「孝養縁第二十二」で終わっているからである。ただし、この章だてにも問題がある。「孝養縁」は、現存巻六写本によれば「第二十二」であるが、梵魚寺本の目次によれば「第二十一」である。さらに、梵魚寺本の目次には、「雑縁第二十二」で終わりであるが、谷大本の序文には「二十四章」とある。また、現存の古文書・古目録類には、『金藏論』

と思われる書名が散見するが、最も多いのが巻数を「七卷」とするものである⁸⁾。

次に、『金藏論』の形式について確認したい。

『金藏論』は、前述のように、二十二(あるいは二十四)の章(縁)に分類されている。それぞれの章(縁)の中には、そのテーマにそった説話がいくつか収録されているのだが、いずれも仏教經典の抄出引用となっている。しかも、各説話は「～縁」と標題され、その出典が明記されている。一貫してこの形式が取られているのである。

- 8) ・『正倉院文書』「衆經要集七卷」：『写經所啓』天平十二年(七四〇)七月八日(統統修一四帙一『大日本古文書』七)、『經疏檢定帳』天平十九年(七四七)六月四日(正集四一裏書)(『大日本古文書』九)、『写疏所解』天平十九年(七四七)六月七日(統修別集三七)(『大日本古文書』九)、『造東大寺司奏』天平神護三年(七六七)条(『大日本古文書』一七)、『一切經奉請文書繼文』(統統修一七帙七)(『大日本古文書』一七)。ただし、「衆經要集四卷 小乘經略集十二卷〈普請内(天平)十年(七三八)四月二十九日〉」(『經卷納櫃帳』統修後修廿三『大日本古文書』七)とするものもある。
- ・永超撰『東域伝灯目録』雜述録三：「衆經要集七卷」「金藏要集七卷」(寛治八年(一〇九四)撰。『大正新修大藏經』五五)。
 - ・七寺藏『一切經論律章疏集伝録并私記』卷上：「衆經要集七卷」「金藏要集七卷」(院政期写本。牧田諦亮監修・落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書』六、大東出版社、平成十年)。
 - ・法金剛院藏『大小乘經律論疏記目録』下卷(人師集傳記合八十三部五百六十七卷)：「衆經要集七卷 百五十九」「衆經略講集七卷 二百」「金藏論一部五卷 百七十」「金藏論一部七卷 二百卅」(前掲書収録)。
 - ・『山王院藏書目録』「金藏論二卷 第五六」「衆經要集二卷 第六七合卷」(延長三年(925)写。佐藤哲英『山王院藏書目録』翻刻(『叡山学報』第十三輯、昭和十二年))。

2. 『金藏論』の検討

前章で確認した『金藏論』について、ここで中国北朝仏教との関連で考察したい。

2.1 仏教類書と『金藏論』

2.1.1. 形式と歴史と

前述したように、『金藏論』は、二十二(あるいは二十四)の章(テーマ、「縁」)に分類され、それぞれの章には仏教経典を抄出引用した説話が、標題と出典とを明記して収録されている。このような形式は、中国の書物の伝統的分類において「類書」と呼ばれるものと同じである。「類書」とは、さまざまな知識・資料を便覧、検索するために編纂され、特に詩文を作る際に典故を見つけるために、森羅萬象をテーマに立て、その分類項目それぞれについて膨大な経論から抄出した記事を、出典を明記して収録したものである。魏の文帝の命によって編纂された『皇覧』一百二十卷(222年)にはじまるとされる、一種の百科事典のようなものである。

『金藏論』に「類書」と同様の形式が導入されたことは、『金藏論』の編纂目的として以下のように書かれていることからわかる。すなわち、『続高僧伝』「道紀伝」には、「以類相從。寺塔幡燈之由、經像歸戒之本、具羅一化大啓福門」とある。また、谷大本の序文には、「周簡摘要言、撰為約引」とあるとおりである。

仏教の類書は、『金藏論』以前に既に見られる。

現存最古のものとして、梁代の寶昌撰(516年)『経律異相』五十巻が知られる。南朝において、『経律異相』という仏教類書が成立するに至るまでには段階があった。すなわち、劉宋の頃から「抄~~経」と名づけられる仏典

の抄録が作成されるようになり、やがてそれらの抄経が集成された抄経集が編集される。梁の僧祐(445~518年)撰『出三蔵記集』巻五には「抄経録」が立てられ、「右抄経四十六部、凡三百五十二卷」(T55,38b)が数えられ、抄経集として「法苑経一百八十九卷」が挙げられている。『法苑経』(失)は、「群経を撮撰して、類を以て相い従う」と注記されている(T55,38b)ように、「類書」に近い形態であったと考えられる⁹⁾。僧祐撰『世界記』五巻(失)、『法苑雜縁原始集』十巻(失)、『釋迦譜』五巻といった特定のジャンルの仏教類書¹⁰⁾を経て、梁の武帝の勅によって僧等撰『衆経要集』八十八巻(失)が編纂される(508年)。『衆経要集』は「但だ希有なる異相、猶お衆篇に散じ、秘説を聞くこと難く、未だ標題を加えず」(T53,1a)という欠点があったため、武帝は寶唱に『経律異相』を編纂させた¹¹⁾。以後も続々と仏教類書は編纂される。梁代のもを『歴代三寶紀』巻十一の記事によって挙げれば、普通年間(520~527年)に武帝勅撰の『義林』八十巻、中大通六(534)年には皇太子蕭綱(簡文帝)勅撰の『法寶聯璧』三十巻、太清年間(547~549年)には湘東王蕭繹(元帝)の勅によって虞孝敬撰『内典博要』三十巻が編纂されている。

これら梁代の仏教類書の編纂は、仏教知識を総合しようとする一連の動きと関連していると考えられる。すなわち梁代には、僧祐撰『出三蔵記集』十五巻などといった経録、寶唱撰『名僧伝』三十巻(514年)および慧皎撰『高僧伝』十四巻(519年)といった僧伝も編纂されている。つまり南朝末期

9) ただし『法苑経』は、先學らの指摘するとおり、『出三蔵記集』において「新集安公注経及雑経志録第四」(巻五)にも収録されていることから、出典を明示していなかった可能性がある。したがって「類書」と言えるかどうかは微妙である。

10) 『釋迦譜』は、分類項目(条目)ごとに諸経の抄出を収録し、出典を明示する形式がとられていることから、佛伝というジャンルにおける「類書」であると言うこともできる。

11) 『経律異相』序(T52,1a)。

になって、後漢代に仏教が伝来して以来、多数の經典が漢譯され、主要なものに序や注が付され、蓄積されてきた膨大な仏教知識の整理分類が試みられたのである。仏教類書もまたその一つであると考えられるべきであろう。さらに、これらの動きは、仏教以外の類書が数々編纂された事実とあわせて考えなければならない。『隋書』経籍志「雑家」によると¹²⁾、梁代の類書として、劉孝標(461-521)撰『類苑』一百二十卷(失)、徐僧權等撰『華林遍略』六百二十卷(失)、劉杳(476-536)撰『壽光書苑』二百卷などが挙げられる¹³⁾。

しかしながら、以上のような南朝における数多の類書の成立が『金藏論』にどのような影響を与えたのかについては、明らかでない。¹⁴⁾

一方、北朝の仏教類書の歴史についてははっきりしない。わずかに、中国の経録に「衆經要集二十卷」(隋法經等撰(594年)『衆經目錄』〈『法經録』〉卷六「此方諸徳抄集二」T55,144c)¹⁵⁾という、類書あるいは要文集の可能性

12) 興膳宏/川合康三『隋書経籍志詳攷』(汲古書院、1995年) p554,555に依った。

13) 中でも『華林遍略』は、普通四(523)年に完成した、『経律異相』について編纂された武帝の勅撰の類書であることが注目される。

14) 南朝における佛教類書の成立について、以前、宮井里佳「梁代の佛教類書『経律異相』の概要と經典引用の一例」(『埼玉工業大學人間社会學部紀要』第三號、2005年)において論じ、先行研究をまとめた。拙論以降の研究としては、落合俊典「漢訳經典の生成と要文集の編集—『法苑珠林』以前の世界」(荒木浩編『小野随心院所藏の文献・圖像調査を基礎とする相關的・総合的研究とその展開 Vol. I』(科学研究費補助金研究報告書、2006年)、船山徹「南齊・竟陵文宣王蕭子良撰『淨住子』の譯注作成を中心とする中國六朝佛教史の基礎研究」(科学研究費補助金研究成果報告書、2006年)など。

15) 隋の彦琮撰(六〇二年)『衆經目錄』〈『仁壽録』〉卷三「別集抄」(T55,172b)や静泰撰(六六三~六六五年)『衆經目錄』〈『静泰録』〉卷三「別集抄」(T55,207a)に、「衆經要集二十卷 後魏世沙門曇暉等撰」とあるものと、前後に列挙される書が同一であることから、同じであると考えられる。さらに、以下の書とも同一であると考えられる。

「周衆經要二十二卷 一百二十法門 右二部二十三卷。魏丞相王宇文黑泰、興隆積典、崇重大乘。雖撰万機、恒闡三宝、第内每常供百法師、尋討經論、講摩訶衍。遂命沙門積曇

があるものを見出すぐらいである。『金藏論』との関係をうかがわせる書名である(谷大本の書名は「衆經要集金藏論」である)ことが注意される。いずれにせよ、南朝の仏教類書の成立とは異なる系譜が北朝にあったであろうことは注意を要すると思われる。

以上のように既に存在した仏教類書が『金藏論』の成立にどのような影響を与えたのかは不明であるが、その類似した形式から、何らかの関係を想定せざるを得ないのである。

2.1.2 構成と内容

しかし、『金藏論』は、仏教類書とは大きく異なる点がある。

まず、『金藏論』は、仏教類書のように、森羅万象を網羅しようとする項目分類ではないということである。ここで、代表的な仏教類書である唐の道世撰(668?年)『法苑珠林』百卷の構成を比較のために掲げると、以下の「篇」に分類される(T53,269 b-c)。

劫量、三界、日月、六道、千仏、敬仏、敬法、敬僧、致拝、福田、帰信、士女、入道、慚愧、奨道、説聴、見解、宿命、至誠、神異、感通、住持、潜遁、妖怪、

頭等、依大乘經、撰菩薩藏衆經要、及一百二十法門、始從佛性、終至融門。而開講時、即恒宣述、永為常則、以代先旧五時教跡。迄今流行山東江南、雖稱學海、軌儀措則、更莫是過。乃至香火・梵音・礼拝・嘆佛、悉是《其内。每事徵覈、領綱有據。》(費長房撰(597年)『歷代三寶紀』卷第三十一「訳経育梁周」(T49,100ab)および道宣撰(六六四年)『大唐内典録』卷五「歴代衆經伝訳所從録第一之五」「後周宇文氏伝訳佛經録第十五」(T55,271b))。

つまり、類書かどうかは定かではないが、「一百二十法門」という章の要文集である。これが『金藏論』編者の道紀が講じたという『成実論』に関わるものであることが推測され、注意を要すると思われる。詳細は、宮井里佳「中国仏教類書と『金藏論』」(『仏教文献と文学—日台共同ワークショップの記録2007—』(国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、2008年)。

變化、眠夢、興福、攝念、發願、法服、燃燈、懸幡、香華、唄讚、敬塔、伽藍、舍利、供養、受請、輪王、君臣、納諫、審察、思慎、儉約、懲過、和順、誠易、忠孝、不孝、報恩、背恩、善友、惡友、擇交、眷屬、校量、機辯、愚戇、詐偽、墮慢、破邪、富貴、貧賤、債負、諍訟、謀謗、呪術、祭祀、占相、祈雨、園果、漁獵、慈悲、放生、救厄、怨苦、業因、受報、罪福、欲蓋、四生、十使、十惡、六度、懺悔、受戒、破戒、受齋、破齋、賞罰、利害、酒肉、穢濁、病苦、捨身、送終、法滅、雜要、伝記

仏教類書が五十巻や百巻などと大部であるのに対し、『金藏論』は七巻（あるいは九巻）二十二章（あるいは二十四章）と分量もきわめて少ない。編者もまた、『金藏論』の撰者は道紀一人であるのに対し、一般的な類書は多く皇帝の勅撰を受け、複数の人によって編纂されている。

この相違は、『金藏論』が編纂された目的が仏教教化（「唱導」）であることに由来すると考えられる。『統高僧伝』『道紀伝』に、「廣讀經論、為彼士俗、而行開化。故其撰集、名為金藏論也。……具羅一化大啓福門。論成之後、與同行七人、出鄴郊東七里而頓。周匝七里、士女通集為講斯論、七日一遍」とあるとおりである。また、義楚撰（954年）『義楚六帖』の「道紀金藏」（T50,701a）という項に、「高齊之初、大弘成實。後事唱導、廣讀經論、集金藏行焉。後自講之、七日一遍¹⁶⁾」とあるとおりである。『金藏論』は、説教の種本として作られ、使用されたのである¹⁷⁾。

16) 『義楚六帖』第三「化道人天第二十三 雜科一十二人」（『禪学典籍叢刊』第六巻下、2001年、臨川書店、底本は東福寺藏宋版本 p232）。

17) なおこの点は、荒見氏による敦煌文學からの見地——『金藏論』が含まれるスタイン4654が語り物の綱要集とみられている写本であることから、『金藏論』は「敦煌では物語りの種本としておおく用いられたのではないかと予想される」（前掲荒見泰史「變と變文」他）——とも一致する。

さらに、『金藏論』の説話は因縁譚であるという、仏教類書にはない特徴がある。ここで言う因縁譚とは、某人の現在世の状態を、過去世における行為(因)の結果・報い(果)であると説く因果応報の物語である。過去世の善行が因となって現在世に善果となり、逆に、過去世の悪行が因となって現在世に悪果となる物語である。これは、インド仏教の伝統的な分類においてavadāna(「譬喩」と漢訳される)に相当する。avadānaは、岩本裕氏によれば、次の三部から成っている。すなわち、1 現在物語、2 過去物語、3 連結(「過去世の何某は現世の何某(現在物語の主人公)である」とブツダが語る部分)、である¹⁸⁾。この構造を『金藏論』中の説話も取っているのである。ただし、後述(2.3.)するように、必ずしも過去物語を持つ因縁譚ばかりではなく、現世においてなした行為(因)がすぐさま現世において報い(果)となってあらわれる説話もある。

『金藏論』において、何故仏法を信ずるべきであるのかは、因果応報の道理で説かれる。すなわち、仏法を迫害すれば、悪果が顕れ、仏法を護持すれば、すなわち塔寺・僧に益すれば、善果が顕れるのである。これらの果報の善悪は、きわめて世俗的な幸不幸と一致する。世俗的な成功や幸福を求めるとなれば、仏法を信ずるべきである、となっているのである。したがって、『金藏論』には仏教の難しい教理は説かれていない。『金藏論』の唱導とは、因縁物語によって庶民の興をひき、仏法を信ずる功德を喧伝するものなのである。

北朝後半期の仏教思想として、空思想を中心として、『大乘起信論』や『涅槃経』や道紀も講じていた『成実論』などの講究が挙げられてきた。それらの経典を『金藏論』は引用することもあるが、全体としては、思想を追求するものではなく、ただ因果の道理を説いているのである。

18) 岩本裕『佛教説話研究 第二巻 佛教説話の源流と展開』(開明書院、1978年) p17,18参照。

以上、『金藏論』が仏教類書と同様の形式を持ちながら、因縁譚から成る仏教教導の書であるという仏教類書とは異なる特徴を明らかにした。

2.2 北周の廢仏と『金藏論』

『金藏論』は、北周の武帝による廢仏を嘆き、仏教信仰の心を培うために編纂されたという。

『統高僧伝』『道紀伝』には次のようにある。

後遭周氏吞併、玄教同廢。呼嗟俗壤、每崇斯業。及開法始、更廣其門。故彼論初云邪見者是也。(T50, 701b)

また、谷大本の序文には次のようにある。

有國王、姓宇文、名邕。跨處西秦、自揚正化。於甲午年中(574)、爲惡魔所誤、正設邪海、即起狂見、傾蕩參尊。至歲次丁酉之年(577)正月之初、魔徒轉盛、輒有勢力、吞滅高氏。握羅斯境、破壞三寶。

『道紀伝』にあるように、『金藏論』の第一章は「邪見縁」である。すなわち、仏教誹謗の悪報と仏教信奉の功德とを説く因果応報の物語が冒頭に収録されているのである。『金藏論』は全体的に、仏教を護持することがいかに利益があるかを説く、きわめて護教的な色彩が強いと思われる。これは、道紀が北周の廢仏を経験したからに他ならないのである。

道紀は、「道紀伝」によれば、元来『成実論』を講じていた¹⁹⁾。『成実論』は、北朝後半期の仏教界においてよく読まれた書であった。のみならず、荒

19) 「然以成實見知」「吾講成實、積三十載」。

牧典俊氏の指摘によれば、『成実論』を対象として「章」形式の講義が始まったとされ、敦煌写本中に『成実論』の系統と考えられる難解な注釈書類が見られる²⁰⁾。そういった当時の伝統の中にいたはずの道紀は、廃仏を経験したことによって、庶民にもわかるような因縁譚で仏教を広める活動へと転じたのである。こういった転回が道紀以外にも見られるのだろうか、留意したい。

2.3 観仏実践と『金藏論』

『金藏論』梵魚寺本巻二の第四～第六章は、懺悔縁、称仏縁、観像縁である。

懺悔、称仏、観像は、当時の仏教実践の中心(の一つ)であったと考えられる。『金藏論』成立に少し先立って、六朝期には『観仏三昧海経』や『観無量寿経』など「観……経」と題する観仏經典群が成立した。おそらくは西域の観相行の実践の流れを組むものだと考えられるが、次第に観相行(相好行)が行われるようになったようである。それらがどのように北朝に入ったのかはまだ不明であるが、北朝では、『梵網経』や北魏以来の禅観実践と結びつき、観仏実践が行われていたことが、近年明らかになりつつある²¹⁾。『金藏論』の第四～第六章は、そういった観仏実践の流れの上に編纂されて

20) 荒牧典俊「序章 北朝後半期佛教思想史序説」(荒牧典俊編著『北朝隋唐中国仏教思想史』、法藏館、2000年)。

21) 船山徹「六朝時代における菩薩戒の受容過程—劉宋・南齊期を中心に—」(『東方学報』六七、1995年)、山部能宜「『梵網経』における好相行の研究—特に禅観經典との関連性に着目して—」(荒牧典俊編著『北朝隋唐中国仏教思想史』、法藏館、2000年)、稲本泰生「小南海中窟と滅罪の思想—僧稠周辺における実践行と『涅槃経』、『観無量寿経』の解釈を中心に」(『鹿園雑集』四、2002年)、倉本尚徳「北朝時代における方等懺と好相行—『大方陀羅尼経』十二夢王石刻図像の新発見とその意義—」(『仏教文化研究論集』十二号、2008年)など。

いるのではないかと思われる。

では、『金藏論』第四～第六章の内容を検討していきたい。

『金藏論』懺悔縁第四では、懺悔すれば重罪が減すると説かれる。第一話「月氏國王與三智人作親友縁」では「今修諸善、慚愧懺悔、喩投冷水。何爲不滅三塗重罪、得生天」、第三話「佛説陀羅尼呪懺悔除罪縁」では「釋迦牟尼、於佛塔前、五體投地、悔過自責、誦陀羅尼、八十一遍。日日如是、過去現在、億百萬劫、所有重罪、悉滅無餘」とあるとおりでである。ただし第二話「化生王子過去香塗塔懺悔縁」では「至心供養、求哀懺悔、瘡尋除差」と、瘡という身体の不調が治るという直接的な利益が説かれている。以上のように懺悔の効用が説かれているが、第二話のように供養して懺悔する、第三話のように仏塔の前で懺悔する、すなわち礼拝・供養（観仏までも入るかもしれない）と同時に懺悔するように、懺悔は単独ではない可能性がうかがえる。

『金藏論』第五称仏縁では、仏名を称える功德が説かれる。第一話「國王殺父至心稱佛得脱地獄縁」では「皆共一時、稱南無佛、地獄猛火、即時化滅、一切罪人、皆得解脱。……稱佛名号、所獲功德、無量無邊、不可爲喩」、第二話「五百釋子過去稱佛生天縁」では「若稱我名、南無諸佛、所獲福德、無量無邊」と。

しかしここで注意したいのは、例えば第二話で、「稱已作禮、及向大衆、大徳衆僧、五體投地、發露懺悔、邪見之罪。諸人受教、懺悔訖已、見佛金色、如須彌山。見已白佛、我今見佛、三十二相、八十種好、無量光明。作是語已、得須陀洹。求佛出家、得阿羅漢、三明六通、具八解脱」とあるように、称名が単独で用いられていないことである。称名し、懺悔すれば、罪が減され、仏の姿を見ることが出来る（見仏）。そして解脱へと向かうのである。称名は、懺悔・観仏（見仏）とセットになっているのである。第三話「財首

菩薩過去稱佛得值佛緣」の構造も同様である。まず塔に入って、仏像の前で礼拝し、称名する。その功德によって、夢で仏に見え、「念仏三昧」を得て、解脱するのである。

『金藏論』第六観像²²⁾縁では、第一、二話は、第五称仏縁の第二、三話と同じく『観仏三昧海経』の抄出引用であって、同様の話の構造となっている。ここで第一話「十方佛過去観像讚歎成佛縁」の全文を引用してみよう。

昔過去久遠、無量世時、有佛出世、號寶威徳上王。時有比丘、與九弟子、往詣佛塔、禮拜佛像。見一寶像、嚴現可觀。禮已諦觀、説偈讚歎。後時命終、悉生東方寶威徳上王佛國、大蓮花中、結跏趺坐、忽然化生。從此已後、恒得值佛。於諸佛所、淨修梵行、得念佛三昧海。得三昧已、佛爲授記。於十方面、各得成佛。東方善徳佛者、彼師者是。其九弟子、作九方佛、謂東南方無優徳佛、南方栴檀徳佛、西南方寶施佛、西方無量明佛、西北方華徳佛、北方相徳佛、東北方三修行佛、上方廣衆徳佛、下方明徳佛。如是十方、由因過去、禮塔觀像、一偈讚歎、今於十方、各得成佛。

入塔し仏像を見(観仏実践である)、礼拝・讚歎する→転生して仏に見え、「念仏三昧」を得る→成仏する、という構造である。

第二話「四方佛過去観像佛得成佛縁」では、入塔して観像し、懺悔する→滅罪→諸仏に見え、「念仏三昧」を得る→授記を得る、という構造になっている。ここでは、観仏は必ずしも称仏や懺悔と同時に実践するものとは描かれていない。

22) 卷一冒頭の目次には「観像縁」とあるが、本文標題には「観仏像」とある。第五称仏縁とそろえて「観仏縁」と考えることもできるが、収録される説話の標題が「……観像……縁」であることから、「観像縁」が妥当であると思われる。

第三話「釋迦過去觀像成佛緣」は、『迦葉經』の抄出引用であって、上記の構造とは少し異なり、画いた仏像の前で禪觀を實踐することによって成仏する、という内容である。

以上、『金藏論』の第四～六章を見てきた。懺悔、称仏、觀像というテーマに沿って、それぞれの實踐の効用を強調する説話を注意深く選んでいることがうかがえるが、上述したように、これらの實踐は密接に関係していることが推察できる。

この『金藏論』の第四～第六縁の章は、懺悔、称仏、觀像の功德が直接的に描かれており、他の章に比較して、過去世の善行が因となって現在に善果となって顕れるという因縁譚の構造が崩れている。この色合いの相違は、『金藏論』編纂の元となった書物に対する思いをはせさせる。すなわち、推測に過ぎないが、『金藏論』が参照した文献には、因縁譚を中心とする抄経集と、これら懺悔、称仏、觀像に関する要文集と、少なくとも二種はあったのではないか、というものである。

さて、ここで、北朝末期の觀仏實踐の例を一つ挙げて、『金藏論』と比較してみたい。取り上げるのは、浄土教の道綽である。道綽の著作『安樂集』には、『觀仏三昧經』が重要な部分でいくつか抄出引用されている。ここでは、第五大門の第四、浄土往生實踐を勧める第四の章で、『觀仏三昧經』を証明として挙げる箇所を取り上げる。

勸後代生信求願往者、依觀佛三昧經云、爾時會中、有十方諸佛。各於華臺中、結跏趺坐、於空中現。東方善德如來、為首告大眾言、汝等當知、我念過去無量世時、有佛名寶威德上王。彼佛出時、亦如今日說三乘法。彼佛滅後、末世之中、有一比丘。將弟子九人、往詣佛塔、禮拜佛像。見一寶像、嚴顯可觀。觀已敬禮、目諦觀之、各說一偈、用為讚歎。隨壽修短、各自命終。即命終已、即生佛前。

從此已後、恒得值遇無量諸佛。於諸佛所、廣修梵行、得念佛三昧海。既得此已、諸佛現前即與授記。於十方面、隨意作佛。東方善德佛者、即我身是。自餘九方諸佛者、即是本昔弟子九人是。十方佛世尊、因由禮塔一偈讚故、得成為佛。豈異人乎。我等十方佛是。是時十方諸佛、從空而下、放千光明、顯現色身、白毫相光。各各皆坐、釋迦佛床。告阿難言、汝知、釋迦文佛、無數精進百千苦行、求佛智慧、報得是身。今為汝說、汝持佛語、為未來世天龍大衆四部弟子、說觀佛相好及念佛三昧。說是語已、然後問訊釋迦文佛。問訊訖已、各還本國。

(『大正藏』四七卷、一七頁、下段)

ここで引用される『観仏三昧経』の内容は、仏塔で仏像に礼拝、観仏、讃歎することによって、転生して諸仏に見え、「念仏三昧」を得、成仏する、という構造である。『金蔵論』の抄出引用と同様である。

道綽は、観仏、見仏を重要視しており、浄土往生行の中心とし、また称仏も重要視しているが、称仏・観仏の実践が北朝末期に行われていた一つの証拠として挙げられるのである。『金蔵論』が称仏・観像の章を設けたのは、こういった実践の流れを組んでのことかもしれない、と推測される。

しかし、道綽の観仏実践には、理論的裏付けがあった。それは、観仏・見仏、すなわちこの場合、阿弥陀仏を礼拝・讃嘆・観察することは、阿弥陀仏は報身であるので、結局空を観ずることに他ならない、というものである²³⁾。一方、『金蔵論』には、理論的裏付けは説かれぬ。この相違は、『金蔵論』が在俗の人々に仏教信仰を勧めるものであったという性格によるものと考えられる。

以上のように、『金蔵論』には、懺悔・称仏・観像の実践を勧める章設けて

23) 道綽の思想については、拙稿「道綽の著作と思想」(引用該当箇所は384~387頁) 参照(藤堂恭俊・牧田諦亮『浄土仏教の思想 第四卷 曇鸞・道綽』(講談社、1995年) 収録)。

いるが、おそらく本格的な仏教実践を勧めているわけではないと考えられる。それらの実践の効用を説くことによって、仏教信仰へと導き、僧や寺への崇敬を高めるためのものであろうと考える。

以上、梵魚寺本『金藏論』巻二が発見されたことによって、初めて知り得た内容に、甚だ不十分であるが、考察を試みた。これらは北朝末期の仏教を考える上で、非常に重要な資料となる。

【付記】

梵魚寺本のデジタル写真は、崔鉉植先生のご厚意により、ご提供いただいた。記して深く感謝の意を表します。

『金藏論』資料の閲覧、提供、引用をご許可くださった、梵魚寺、興福寺多川俊映貫首、大谷大学博物館・図書館、ならびに関係各位に深甚なる謝意を表します。

キーワード

『金藏論』、中国北朝、仏教類書、日本古写本、敦煌写本、梵魚寺、韓国版本、懺悔

Abstract

The *Jinzanglun* and Chinese Buddhism in the Late Period of the Northern Dynasties

MIYAI Rika

Associate Professor, Saitama Institute of Technology

The *Jinzanglun* 金藏論 is an anthology of the Buddhist Canon compiled by Daoji 道紀 in the late Northern Dynasties in China (the later half of the 6th century). Although the complete original text has not survived, there are several extant scrolls in Japanese manuscripts, and some pieces have recently been found among the Dunhuang 敦煌 manuscripts, and the woodblock edition belongs to the late period of the Goryeo 高麗 Dynasty of the Beomeosa 梵魚寺 in Korea. We know that this important text was widely read and highly valued not only in China, but also in other areas in East Asia.

The outline of this paper is as follows. Part 1: the extant copies of the *Jinzanglun* will be organized and the importance of the woodprint edition in Korea will be revealed. Next, in Part 2.1.: I will point out that while the *Jinzanglun* resembles the Buddhist encyclopedia, that is to say 'leishu 類

書’ in style, it is difficult to place it in the history of the Buddhist encyclopedia, and moreover, its characteristic that the anthology of tales, referred to as ‘avadāna’, is different from that found in the Buddhist encyclopedia. In Part 2.2: I will point out that the *Jinzanglun* was compiled to revive Buddhism after the persecution by Emperor Wu 武帝 of the Northern Zhou 北周 Dynasty, and thus its theme indicates the propagation of Buddhism. Finally, in Part 2.3.: from scroll 2 of the Beomeosa edition, I will examine Chapter 4: Confession 懺悔緣第四, Chapter 5: Praising Buddha 稱佛緣第五 and Chapter 6: Beholding the Buddha statues 觀像緣第六. I will explain how the three practices of confession, praising Buddha and beholding the Buddha statues are interrelated and furthermore how this all reflects Buddhist practice at that time.

Key Words: *Jinzanglun*, Northern Dynasties of China, Buddhist encyclopedia, Japanese manuscripts, Dunhuang manuscripts, Beomeosa, Korean woodblock prints, confession

2010년 5월 13일 투고
2010년 6월 7일 심사완료